

Departure が引き出す表現力

堤 孝



Departure I のページをめくった時の衝撃は本物でした。Write on Your Own では英語が苦手な生徒にも、英語で自分を表現できる喜びを与えてくれる“魔法”が仕掛けられています。英語が苦手だということも忘れて、気づいたら英語で自分を語っているという次第です。“教師の力量”に左右されず、英語授業の理想形を生み出す魔法です。高校生が書きたくなるトピックと16歳の思考レベルに過不足ないモデル英文が、彼らに表現する意欲を与え続けるのです。

授業では「英語で自分の考えをクラスメートに伝えるために、*Departure I* を活用する」という意識を生徒と共有しています。文法項目を学んで、最終的に英語で表現できるようになるのではありません。最初に Write a Paragraph のタスクを確認し、最終的にそのトピックに関してお互いに口頭で意見交換するという目的を持つことで、そこにたどり着くために必要な文法事項を正確に学んでいくという発想です。

Departure I の武器の一つは Write a Paragraph の前にある Get Ready to Write です。用意されたトピックについてパラグラフを構成するのに必要な情報を生徒から魔法のように引き出していきます。英語を愛する一部の生徒を除いて、自分のことをまとまりのある英文で表現するのは、口で言うほど簡単ではありません。英語の蓄積が少ない高校生にいきなりアウトプットを強いるのは英語学習のモチベーションを奪い取る他にはあまり効果がないように思われます。書くプロセスを手助けするように周到に練られた Get

Ready to Write がアウトプットに抵抗を持たない生徒を生み出しています。

このような形で、英語で自分を表現することに慣れた生徒たちは、本当によく書きます。かなり英語が苦手な生徒も短時間で“分量は”相当書きます。このような生徒は、書いている内容もクリエイティブなものが多く、こちらが英文の内容に引き込まれることもしばしばです。1年生の時点では意味を重視し、たくさん書くことを目標にしていますが、正確さは3年間の言語活動を通じて身につけていきます。

受験の英語もコミュニケーションの英語ありません。コミュニケーション英語Ⅰも英語表現Ⅰも、中学、高校、大学の英語も同様です。一つだけ分かったのは、「自分の考えを伝えることを目的に4技能満遍なく英語を使っていれば、受験に対応する力も自然についている」ということです。例年に比べるといわゆる演繹的な文法指導と文法演習量は圧倒的に少ないですが、コミュニケーション能力を測るテストだけでなく、模擬試験の結果も授業担当者の予想を遙かに超えています。

最後に、*Departure I* で Write a Paragraph まで行うと、一つの課を終えるのにそれだけ長く時間がかかります。残念ながら扱えない課が出てきたら、コミュニケーション英語Ⅰで取り上げるようにしています。何より Write a Paragraph を活用した表現活動を授業の中心に据えることで、*Departure I* の効果が最大限に発揮されと考えています。

(つつみ たかし・青森県立田名部高等学校教諭)